

貞観三年東大寺大仏供養祝願文

後藤 昭雄

一

平安朝の仏事においてはいろいろな漢文の文章が作られ読誦されたが、その一つに祝願文がある。私は最近、古代の漢文の文体研究の一環として、この祝願文に関する基本的問題について考察を行った。⁽¹⁾

仏事の場で用いられる主な漢文として願文、表白、諷誦文、祝願文の四種⁽²⁾があるが、祝願文は他と異なる独自性を有している。

一つは文体（文型）である。他の仏教漢文は四六駢儷文（以下「四六文」）で書かれているが、祝願文は一句が四字

で、この四字句を長く連ねていく。經典の偈のような形である。これは一見して祝願文を他と分かつ顕著な特徴である。

しかし、この独特な形態は、当初からそうであったのではなく、途中から四字句に変わったのである。現存する祝願文を諸資料から拾い集めて、時代を追って並べてみると、それがはっきりとわかる。問題となる初期の作をあげる。

1 仁王会祝願文 空海 天長二年(825)（『類聚国史』巻一七七）

2 仁王会祝願文 不詳 承和十四年(847)（同右）

3 仁王会祝願文 不詳 貞観二年(860)（同右）

4 東大寺盧舎那仏供養呪願文 菅原是善 貞觀三年
〔三代実録〕貞觀三年三月十四日)

1、2は四字句ではない。2の冒頭を例にすると、次のとおりである。

夫、識之所識、曷嘗非識、

知之所知 未始不知。

是故、能行而所行兼空、則撰受之理廢、

自性而無性不異、則執取之念忘。

このような四六文である。それが3になると、このようになる。同じく冒頭を引く。

実知玄宗、仁王般若、大乘滿字、護国秘藏、

波斯匿王、対揚之主、無上世尊、演説之師、

4も同様である。今のところ、平安末まで三十一首を拾遺しているが、5以下、31まで、すべて四字句で書かれている。すなわち、2と3との間で、呪願文は四六文から四字句へと、文体に大きな変化があった。

呪願文を特徴づけるもう一つは、それが用いられる仏事の場合である。先掲の1〜4の表題にすでに示されているが、一つは仁王会であり、もう一つは供養である。現存の三十一首も、仁王会十六首、供養十五首と相半ばする。しかし

呪願文を本当に特徴づけるのは仁王会である。仁王会については次に述べるが、まず供養について述べておこう。

呪願文は死者の追善を初め、本論で主題とする仏像、あるいは『法華経』などの經典、また寺院やその堂塔などの供養の法会において用いられる。呪願文はこのように諸供養において用いられる文章であるが、供養においては願文もまた併せ用いられる。現存の十五首のうち、二首を除いては、同時に作られた願文が遺存している。すなわち、諸供養の法会で呪願文が用いられる時には、併せて願文も用いられたと言つてよさそうである。

しかし、仁王会においては、一度を例外として、呪願文に併せて願文が用いられることはなかった。仁王会においては、呪願文が専用の文章であった。

仁王会は『仁王般若経』(『仁王護国般若波羅蜜多経』)を講読して鎮護国家また災厄の除去、福利の招来を祈る大がかりな仏事である。一つに天皇の即位に伴つて行われるものがあり、「一代(一度)仁王会」と称される。また兵乱、異国の来襲や災害などの事件、事態に際しては、臨時仁王会が催される。さらに年中行事化して春秋二季の仁王会となる。

このような仁王会において、呪願文が作られ読誦された。

二

前稿「呪願文考序説」⁽¹⁾では、遺存する呪願文としては最も早い作である空海の「仁王会呪願文」を読んだ。それは専ら前述の四六文から四字句への変化の理由なり、過程なりを知り得ないかという関心からであった。

前節で述べたように呪願文が用いられるのは仁王会と供養仏事とである。そこで、本稿では呪願文が用いられるも一つの場である供養における作品を読むこととする。対象とするのは供養呪願文としては最初の、前掲4「東大寺盧舎那仏供養呪願文」である。供養においては併せて願文が作られることも先に述べたが、これも幸いに残っている。併せて読んで、両者の関係を初め、見出だされる問題を考えてみたい。

文徳朝の斉衡二年（八五五）五月二十三日、南都東大寺の大仏の頭部が落下するという椿事が出来た。この日、

東大寺から次のような奏言がなされた（『文徳実録』同月庚午条）。

毘盧舎那大仏の頭、自づから落ちて地に在り。

仏頭は自然に落ちたという。七月二日には大仏を建立した聖武天皇の佐保山陵に使者を遣して「策命」を奏しているが（同七月戊申条）、これにも、

御願として造り奉り給へる東大寺の盧舎那仏、時代久しく経にたれば、自然に毀ち損ひて、去る五月二十三日を以て頹れ落ち給へり。（原文、宣命体）

という。長い歳月の経過によって自然に破損したという。ただし、同年の四月から五月にかけて地震が立て続けに起こっていることから、現在では落下の直接の原因は地震によるものであるかと考えられている。

『文徳実録』の同年九月甲戌条には「修理東大寺大仏司檢校」として大法師真如しんじゆの名が見えるので、直ちに修復に着手したと考えられる。しかしその事業は順調には進まず、修理が完成し、大仏供養会が催行されたのは貞観三年（八六一）三月であった。六年近い歳月を要している。天皇も文徳が没し（八六一年）、清和の治世となっていた。

貞観三年三月十四日、仏頭修理の完成を祝う開眼会が行

われた。その盛大のさまは『三代実録』が記述している。そうして、そこに盧舎那仏の仏前で読誦された「呪願文」と「呪願」とが引用されている。新訂増補国史大系本で三頁余の長大な作品である。作者は文章博士菅原是善これむ。道真の父である。

以下、これを読む。ただし紙幅の都合で、本号では「呪願文」（一般にいう〈願文〉）を読み、「呪願」（同〈願文〉）の読解及び問題の考察は後稿で行う。

呪願文の本文は新訂増補国史大系本に拠り、一部を佐伯有義校訂標注『増補六国史』（名著普及会、一九八二年復刊）によって改めた（その字の右に・点を付した）。なお、語句の解釈についても当本の標注に教示を得た。

粵若天国押開広庭天皇十三年壬申、仏像西躡、釈教東来。至于感神聖武皇帝天平十五年癸未、敬造毘盧遮那大仏。二百有余載。

金姿誕耀、光輝百億之中、
玉相宏開、震動三千之外。
一草一壤、猷至誠而爭先、
一日三拝、応弘誓以競進。

人神感慶、光趺已成。
模兜率之下生、状須弥之高峙。

爰設開眼会、車駕親臨。

旌旗扞天、鐘鼓震地、四夷間奏、万樂更陳。

自斯而後、一百余祀、先皇齊衡二年乙亥、秋九月、

現寂滅之為楽、称諸法之必空、

廢千柱之扶持、為一時之傾毀。

靈顏頓落、疑滿月之暮西山、

宝髻俱投、似遊雲之頽北磻。

真容特峙、儼若思惟、

玉座無驚、宛然禪定。

先皇、大鈞无事、神器有歸。

堯曦將仏鏡俱懸、軒車与法輪同転。

刑罰措而不用、功德因以同施。

慨諸仏之失元首、恨衆庶之無瞻仰。

以為、神力不動於大力、四禪不壞於三災、勾海將留、

魔風可返。

即、傍謀卿相、博詢芻蕘、

採公輪班之雲械、挾張平子之參輪。

周官詮揆日之工、荆谷練成風之功。

雖則道霑遐邇、貺動幽明、

龍王移水府之琛、星客布天國之寶、

紅粟朽廩、贍萬民而有贏、

青鳧委貫、散四海以無盡、

猶示功非獨拳、力寄群緣、一切偕心、衆生共助。

一粒攸捨、齊金剛之珍藏、

半錢所施、比銅山之陶鑄。

於是、

神靈致感、奔為知識之先、

外道歸心、還為恭敬之輩。

何況、施身童子、忍辱仙人、天女持花、山神獻菓。

三槐九棘、褫玉佩而從婦、

桂殿椒房、落金釵以靡惜。

無量无尽、荷担爭馳、

自西自東、車馬競至。

遂使銀繩運轉、見飛頭於虛空

璧相全還、瞻凹面於寶殿

猶喻漢帝之日再中天上、

秦王之鏡更出地中。

星毫一点、排重雲而宵光、

花簪四照、逐長春以晷發。

前仏後仏、非謂二仏、

前身後身、猶是一身。

如去如來、不生不滅、豈此之謂哉。

若使陰陽為炭、万物為銅、較量功力、豈如此哉。

自鼎湖龍去、梧岫雲飛、藻纘有遺、供養未畢。

爰今上、垂衣致化、寢繩成功、

馭七聖而無為、軼三皇以有載。

憂良凶之不竟、悲善業之無成、率先百工、遂為具相。

以此、貞觀三年歲次辛巳、春三月十四日、

青蓮湛日、褰翠幌而高臨、

楮菓涵唇、啓紅窓以密咲。

三十二相、煥若天成、

八十四儀、巍如踊出。

即便、莊嚴金光護國之香場、排弁天平勝寶之旧事。

層甍四注、激奔電於彫轡、

複屋三休、繞浮烟於繡檻。

瓊廡清英之地、鸞鷲成行、

琪樹恢廊之庭、鸞鸞致態。

飛箏列鐸、抽上妙之奇調、

清唄梵鐘、發中天之異響。

初虹曳綵、即挂新幡、

瑞鳳翻金、還栖旧刹。

香煙花雨、供三世仏之虚空、

玉饌瓊漿、薦十方僧之現在。

天籟地籟、參差万殊、

南音北音、鏗鏘九變。

宝螺獸吼、法鼓雷鳴、蕩穢滌邪、和神感鬼。

激楚陽阿之曲、俳優狄鞮之倡、莫不動風雲致鱗羽者矣。

於是、

閭閻霧撲、士女雲趨。車不得旋、人不得顧。

繞長廊而遊目、翠簾啓窓、

推高門而翕肩、紅袖成帳。

非夫含枢宅海提象御震者、焉能動而行之、

非夫薰修百億覆護三千者、誰敢靜而当之。

然則、

金鍾盛四海之水、能灌頂者曰師、

玉斗騰七耀之暉、独臨胸者称聖。

先分功德、救濟神祇、早脱威怒之煩、速趨慈善之果。

憑斯功德、奉資感神之山陵、

以此勝因、奉翊田邑之靈廟。

俱懸真鏡、為遍周法界之光、

同轉梵輪、為願行円滿之仏。

令茲景福、奉薦聖朝。

四三才而齊儀、六五龍而比寿。

愕夢無侵其慮、甘寢有恬其神。

璇璣不廢、玉燭恒照、九土開謳、千廂發詠。

太皇太后、中宮、

摩耶之徳、窮累劫而無銷、

章徳之規、与坤元以等久。

又、親王諸王、相府脚門、

拱北辰而無移、拋南岳以不動。

百僚之臣、千城之宰、比屋流祥、闔門契福。

十方之所該被、三界之所包含、俱出塵区、同登智岸。

訓読文は内容によつて段落に分け、説明を加え、大意を取つていく。

(一) 粵若こころに天国押開あめくにおしはるきひろにわ広庭天皇十三年壬申、仏像西かへりに瞻

み、釈教東に來たる。

感神聖武皇帝の天平十五年癸未、敬ひて毘盧遮那大

仏を造る。二百有余載なり。

金姿誕いに耀き、百億の中に光輝し、

玉相宏く開き、三千の外に震動す。

一草一壤、至誠を献じて先を争ひ、

一日三拝、弘誓に应じて以て競ひ進む。

人神慶びに感じ、光跌已に成る。

兜率の下生に模し、須弥の高峙を状る。

爰に開眼会を設け、車駕親臨したまふ。

旌旗天を払ひ、鐘鼓地を震はせ、四夷間奏し、万楽更に陳ぬ。

第一段は聖武天皇による大仏の建立について述べるが、先立って、欽明天皇十三年(五五二)の仏教伝来から筆を起こす。それより二百年近くを経た天平十五年(七四三)十月、聖武は盧舍那大仏の造立を發願する。

ここの表現には聖武の發願の「詔」(『続日本紀』十月辛巳条)が踏まえられている。「一草一壤」は「一枝の草、一把の土を持つて像を助け造らんと情願ひ」、「一日三拝」は「日毎に三たび盧舍那仏を拝むべし」に基づく。なお、「至誠を献じて」とほぼ同じ「至誠を發して」の語も「詔」

にある。また、大仏についての「百億」と「三千」の対は「国家珍宝帳」願文に「仁は百億を霑し、徳は三千を被ふ」と用いられている。

大仏の完成に続いて開眼会の記述があるが、これは天平勝宝四年(七五二)四月二十日のことである。盛大な音楽のことが述べられているが、『続日本紀』同日条の

雅楽寮及び諸寺の種々の音楽、並びに咸来り集まる。復王臣諸氏の五節、久米舞、榻伏、蹋歌、袍袴等の歌舞有り。東西より声を發し、庭を分けて奏す。

を踏まえるものであろう。

(二) 斯れよりして後、一百余祀、先皇の斉衡二年乙亥、

秋九月、

寂滅の為樂を現じ、諸法の必空なるを称し、

千柱の扶持を廢し、一時の傾毀と為る。

靈顏頓かに落ち、満月の西山に暮れたるかと思はれ、

宝警俱に投げられ、遊雲の北欄に類るるに似たり。

真容特に峙ち、儼として思惟するが若し、

玉座驚くこと無く、宛然として禅定せり。

ここは大仏の仏頭の落下についていう。ここで注目されるのはその時である。斉衡二年(八五五)九月とするが、

これは独自の記述である。最も拠るべき『文徳実録』は五月二十三日とする。同七月戊申条所引の「策命」に「去る五月廿三日を以て頹れ落ち給へり」とある。また後代の編著には五月五日説、また七月説が記されているが、根拠に乏しい⁽⁵⁾。いずれにしても、九月とするものは他になく、何に基づくのか、未詳である。

(三) 次いで修復についての叙述であるが、長いので、さらに分ける。

1 先皇、大鈞事^{たいくんじ}無くして、神器帰する有り。

堯^{ぎょう}曦^{せき}仏鏡^{ぶつきやう}と俱^{とも}に懸^かかり、軒車^{けんしや}法輪^{ふりん}と同一に転ず。

刑罰措^おきて用ゐず、功德^{とくどく}困りて以て同に施す。

諸仏の元首^{ごうすう}を失へるを慨^{あは}き、衆庶^{しゆじゆ}の瞻仰^{せんやう}すること無きを恨む。

以為^{おも}へらく、神力は大力に動かされず、四禪は三災にも壞^{こぼ}たれず。勾海^{こうかい}は將^{まさ}に留^{とど}まらんとし、魔風^{まふう}は返るべし。

「先皇」は文徳天皇。「堯曦」は古代の聖帝である堯のような徳。「軒車」は「軒駕」に同じく、黄帝（軒轅氏）を掛けていう。「刑罰措きて用ゐず」は『史記』卷二十三、「札書に「伝に曰はく」として「刑は措きて用ゐず」とあ

る。なお、「勾海」は不詳。

ここは文徳天皇の再建への決意をいう。

2 即ち、倂^{あまね}く卿相^{けいさう}に謀^{はか}り、博^{ひろ}く芻蕘^{すうじやう}に詢^{もと}る。

公輸班^{こうしゆはん}の雲械^{うんけい}を採^とり、張平子^{ちやうへいし}の參輪^{さんりん}に拠^よる。

周官^{しゆかん}は日^ひを揅^{はか}る工^{こう}に詮^{あきら}かにして、荊容^{しやうよう}は風^{かぜ}を成^{なり}す功^{こう}に練^ねれたり。

「芻蕘」は草刈りと木こりで、下層の民。『詩経』大雅「板」に「先民言へること有り、芻蕘に詢ると」とある。

「公輸班」は春秋時代の魯の名工。城を攻める道具として雲梯（高いはしご）を作った。「雲械」がそれであるが、再建の工匠であった齋部文山の卒伝（『三代実録』貞觀九年四月四日条）に「文山は轆轤の術を究め、雲梯の機を構へ、断ちし頭を引き上げ、大仏の頸に續ぐ」とある。「張平子」は後漢の張衡。二京賦（『文選』卷一）の作者として知られるが、天文、技術にも詳しかった。「參輪」は彼が用いた機械。「日を揅る」は『詩経』邶風「定之方中」に「之れを揅るに日を以てし、楚の室を作り為す」とあるのに拠る。太陽の出入する方向を観測して方角を定める。「風を成す」は『莊子』徐無鬼の逸話に基づく。郢^{えい}楚^その男が匠石に鼻の先に付いた漆喰を取ってくれと頼んだ。匠

石はまさかりを振りまわし風が起こつた（「匠石、斤を運らせて風を成す」）が、男は落ち着いたもの、漆喰は削り取られていた、という。「荊」は楚の別称。「容」は「客」の誤りであろう。

ここはさまざまの技術が総動員されたことをいう。

3 則ち、道は遐邇を露し、旣は幽明を動かし、

龍王は水府の琛を移し、星客は天国の寶を布く。

紅粟廩に朽ち、万民を贖けて贏り有り、

青鳧貫に委せ、四海に散じて以て尽くること無しと雖も、

なほ功は独り挙ぐるに非ず、力は群縁を寄せ、一切心を借にし、衆生共に助くるに示さる。

一粒捨つる攸、金剛の珍藏に斉しく、

半銭施す所、銅山の陶鑄に比す。

「遐邇」は遠くも近くも。「紅粟」は腐つた穀物。左思

「呉都賦」（『文選』巻五）に見える語。「青鳧」は銅銭。

「貫」はこれに通ずひも。

ここは、たとえ有り余る貯えがあつたとしても、人々の協力援助が不可欠であることをいう。

4 是に於いて、

神靈感を致し、奔つて知識の先を為し、外道心を帰して、還つて恭敬の輩と為る。

何ぞ況んや、施身童子、忍辱仙人、天女花を持ち、山

神菓を献ず。

三槐九棘、玉佩を褫ぎて従ひ帰し、

桂殿椒房、金釵を落として以て惜しむこと靡し。

無量无尽、荷担して争ひ馳せ、

西より東より、車馬競ひ至る。

「知識」は修復のため金品を寄進すること。「施身童子」は忍辱のことか。毘婆尸の時代、波羅那国の太子、忍辱は父母の病気を直すため、自分の身を割いて薬に宛てた。これをいうか（『増補六国史』標注）。「忍辱仙人」は釈迦をいう。「施身童子」と「忍辱仙人」が並記された例に、初唐、王勃の「梓州通泉県惠普寺碑」（『文苑英華』巻八五一）に、「施身童子は巖窟に戻り、忍辱仙人は罽戸に来儀す」とある。「三槐九棘」は大臣公卿、「桂殿椒房」は後宮をいう。

前段を承けて、多方面からの助力喜捨があつたことを記す。

(四) 仏頭の修復が完成したことを述べるが、二つに分け

る。

1 遂に銀繩運転して、飛頭を虚空に見し、

璧相全還して、円面を宝殿に瞻せしむること、

なほ漢帝の日、再び天上に中たり、

秦王の鏡、更に地中より出づるに喩ふ。

星毫一点、重雲を排きて宵に光り、

花簪四もを照らして、長春を逐ひて以て暁に発す。

前仏後仏、二仏と謂ふに非ず、

前身後身、なほ是れ一身のごとし

如去如来、不生不滅、あに此れを是れ謂はんや。

若し陰陽を炭と為し、万物を銅と為さしめなば、功力

を較量するに、あに此くの如からんや。

「飛頭」は高所にある仏頭。「漢帝の日再び天上に中た

り」は次の故事に拠る。漢の文帝（高祖の子）は軍の中で

生まれ、成長しても父の所在を知らなかったが、毎日、代

（河北省）の門外で祭を行っていた。高祖はしばしば夢に

一人の子が自分を祭っているのを見て、使者を代に遣わし

て捜させ、その子を見出だした。代王に立てようと考え、

呼び寄せたが、期日に間に合わなかった。しかし、太陽が

再び天に昇った（「日為再中」（『風俗通義』巻二）。文帝

は代王の地位を足掛かりとして帝位に即く。

「秦王の鏡」は未詳。「星毫」は仏の額の白毫。「如去」

は「如来」の別称。「陰陽を炭と為し、万物を銅と為す」

は賈誼の「鵬鳥賦」（『文選』巻十三）に、「天地を鑪と為

し、造化を工と為す。陰陽を炭と為し、万物を銅と為す」

とあるのを用いる。

2 鼎湖より龍去り、梧岫に雲飛びてより、藻績遺れる

有り。供養未だ畢らず。

「鼎湖」、伝説で黄帝が鼎を鑄たとされる地。河南省。完

成すると、天から龍が降りてきて、黄帝はそれに乗って天

に昇ったという。帝王の死をいう。「梧岫」、舜は蒼梧（湖

南省）で没した。両者で文徳天皇の死をいう。「藻績」は、

「藻」は飾り、「績」は絵で、装飾。『文選』（巻四十一、陳

琳「為曹洪」と「魏文帝書」の用語。

文徳天皇は天安二年（八五八）八月二十七日に没した

が、その後もなお装飾等の作業は残されていた。したがっ

て開眼供養を行うには至らなかったという。

(五) 開眼供養大会についての叙述であるが、先立って清

和による事業の継承が述べられているので、ここも分け

る。

1 愛に今上、衣を垂れて化を致し、繩に寝て功を成し、七聖を馭めて為すこと無く、三皇に軼ぎて以て截むる有り。

良図の竟へざるを憂へ、善業の成ること無きを悲しみ、百工を率先して、遂に具相と為す。

後を承けて「今上」、清和天皇が即位する。「衣を垂れて」は『周易』繫辭下伝の「黄帝堯舜衣裳を垂れて天下治まる」に基づく。「繩に寝て」は『文子』卷上に「虞穰氏の天下に王たるや、石を枕として繩に寝て」とある。「七聖」は『莊子』徐無鬼に登場する黄帝ほかの七人。牧童に天下を治める道を教えられる。「三皇に軼ぐ」は『漢書』卷八十七上、揚雄伝の「五帝の遐迹に軼ぎ、三皇の高蹤を躡む」に拠る。以上、清和を聖主と称える。

その清和の指示によつて残された作業が進められ、完了したというが、史書にもこれに該当する記事は見いだせず、具体的なことは不詳である。

2 供養会の盛儀の様子を記す（説明の便宜のため、行数を示した）。

此を以て、貞観三年歲次辛巳、春三月十四日、青蓮目に湛へ、翠幌を褰けて高く臨み、

緒菓唇を涵し、紅窓を啓きて以て密かに咲む。

三十二相、煥として天の成せるが如く、
五八十四儀、巍として踊り出づるが如し。

即便、金光護国の香場を莊嚴し、天平勝宝の旧事を排弁す。

層疊四に注ぎて、奔電を扇櫛に激り、
復屋三たび休み、浮烟を繡檻に繞らす

瓊廡清英の地に、鶯鷺行を成し、
10 琪樹恢廊の庭に、鷓鴣態を致す。

飛箏列鐸、上妙の奇調を抽で、
清唄梵鐘、中天の異響を発す。

初虹綵を曳きて、即ち新幡を掛け
瑞鳳金を翻して、還旧刹に栖む。

15 香煙花雨、三世仏の虚空に供へ、
玉饌瓊漿、十方僧の現在に薦む

天籟地籟、參差万殊たり、
南音北音、鏗鏘九変す。

宝螺獸のごとく吼え、法鼓雷のごとく鳴り、
20 穢れを蕩ぎ邪を滌ひ、神を和げ鬼を感ぜしむ。

激楚陽阿の曲、俳優狄鞞の倡、

風雲を動かし、鱗羽を致さざる者莫し。

是に於いて、

閻閻霧のごとく撲くし、士女雲のごとく趨く。

25車は旋るを得ず、人は顧るを得ず。

長廊を繞りて目を遊ばせ、翠簾窓を啓き、

高門を推して肩を翕はせ、紅袖帳を成す。

貞觀三年三月十四日は仏頭修理完成の供養大会の日である。『三代実録』のその日の条に、

東大寺に無遮大会を設け、毘盧舍那大仏を供養し奉る。

とある。

まず仏頭の描写である。「三十二相」は仏が持つ三十二の身体的特徴。「青蓮目に湛へ」という紺青の瞳もその一つである。「八十四儀」は經典に習見の「三十二相八十種好」に基づいて、八十種好(仏の八十の吉相)の「八十」を「三十二」の対語として「八十四」に変えたものか。「三十二相」と「八十四儀」を対語とする先例に、王勃の「梓州飛鳥原白鶴寺碑」(『文苑英華』卷八五〇)の「三十二相、玉座に臨みて相輝き、八十四儀、金山を擁して円立す」がある。

7・8行は莊嚴された大仏殿であるが、「四に注ぐ」は

四方に拡がる屋根。「三たび休み」は一気に登れず、途中で休むことで、建物が高いことをいう。「繡檻」は『三代実録』の「殿廊の柱は衣ふに錦繡を以てす」である。この

層疊四注、激_二奔電於雕檻、

複屋三休、繞_二浮烟於繡檻。

の表現は王勃の前述「白鶴寺碑」の

層疊四合、燦_二奔電於丹楹、

複殿三休、絡_二浮烟於翠幌。

に拠るものである。「翠幌」は是善は2行目に用いている。

なお「四注」の措辞は王勃は「惠普寺碑」(前出)においても、

紺壇煙屬、疏_二絶閣_一而三休、

紫殿雲深、徹_二迴廊_一而四注。

と、やはり「三休」と対語として用いている。

9・10行は参列の僧侶と高位高官である。「鷲鷲」は仏の弟子、舍利弗の別称であるが、ここでは僧をいう。『隋書』卷十四、音楽志に「鷲鷲行を成す」とあるが、これを二行に振り分けた形になっている。

13行は色鮮やかな幡、15行は仏前に供えられた香花をい

うが、『三代実録』は「幡蓋を藻鏝し、香花を排批す」と対句とする。

11・12行及び17・21行と音楽についての記述が多いが、『三代実録』も「大唐・高麗・林邑等の楽、鼓鐘肆ね陣ね、糸竹方べ羅ぬ」、また「後に梵唄響きを接し、衆楽通ひに奏す」と同じく多弁である。21行は司馬相如「上林賦」(『文選』巻八)の「激楚、結風す。俳優、侏儒、狄鞮の倡、耳目を娛しましめ、心意を楽しましむ」を借りる。「激楚」は歌曲名。「狄鞮」は西方の異民族の楽。「俳優」は芸人。「侏儒(小人)」と共に雑伎を行ったのである。是善は「結風」に変えて「陽阿」の語を描いているが、これは「淮南子」に見える曲名。「説山訓」に「美く和せんと欲する者は、必ず先づ陽阿、采菱より始む」とある。22行の「鱗羽」は魚と鳥。こうしたものをも感動させる。24行以下はこの盛儀を見ようと会した群集の描写である。24行、「閭閻」は庶民。「霧のごとく撲くし」の「撲」は地を尽くしの意。王勃「洪府滕王閣に登りて餞別する序」(『文苑英華』巻七七八)に「閭閻地を撲くし」とある。「閭閻霧撲、士女雲趨」の対偶は王勃「広州宝莊嚴寺舍利塔碑」(『文苑英華』巻八五二)の「閭閻霧のごとく撲

くし、士女雲のごとく流る」を用いる。

25行は身動きもできない雑踏のさまであるが、班固「西都賦」(『文選』巻一)に「人は顧るを得ず、車は旋るを得ず」とあるのを前後させて用いる。また「人は顧るを得ず」は『三代実録』にも「足を躡み肩を翕はせ、人顧るを得ず」と用いられているが、「肩を翕はせ」の語は27行にある。

(六) 最後の段落で、祈願の意を述べる。

夫れ枢を含んで海に宅り、象を提げて震を御するに非ざれば、焉ぞ能く動きて之れを行はんや。

夫れ百億を薰修して三千を覆護するに非ざれば、誰か敢へて静かにして之れに当たらんや。

5 然れば即ち、

金鍾に四海の水を盛り、能く頂に灌ぐ者を師と曰ひ、玉斗に七曜の暉を騰げ、独り胸に臨む者を聖と称す。先づ功德を分かちて、神祇を救済し、

早く威怒の煩ひを脱して、速かに慈善の果に趨かん。

10 斯の功德に憑りて、感神の山陵を資け奉り、此の勝因を以て、田村の靈廟を翊け奉らん。

俱に真鏡を懸けて、遍周法界の光と為し、

同に梵輪を転じて、願行円満の仏と為さん。
茲の景福をして、聖朝に薦め奉らしめん。

15 三才を四として儀を斉しくし、五龍を六として寿を比

へん。

悞夢其の慮を侵すこと無く、甘寢其の神を恬かにする

こと有らん。

璇璣廢れず、玉燭恒に照らし、

九土謳を開きて、千廂詠を発せん。

太皇太后、中宮、

20 摩耶の徳は、累劫を窮めて銷ゆること無く、

章徳の規は、坤元と与に久しきを等しくせん。

又、親王、諸王、相府、卿門、

北辰に拱して移ること無く、南岳に拠りて以て動かざらん。

百僚の臣、千城の宰、

25 比屋祥を流へ、闔門福を契らん。

十方の該被する所、三界の包含する所、

俱に塵区を出で、共に智岸に登らん。

1・2行と3・4行は帝王と仏とを対偶として、それぞれ
の徳を称える。「枢を含む」は黄帝に関わる語。『後漢

書』卷二、明帝紀の「五帝」の注として引かれた『五経通義』に「黄帝は枢紐を含む」とある。また「象を提げ」も同じ。『大唐西域記』の叙に「帝軒、象を提ぐ」とある。「帝軒」は軒轅氏で、すなわち黄帝。

10行以下は大仏の修復という善行（「功德」「勝因」）によって、あらゆる人々に仏の恩徳が与えられんことを、具体的にいちいちに分けて述べていく。

10・11行は「感神」、聖武天皇と、「田村」、文徳天皇である。

14～18行は「聖朝」、当代清和天皇についてである。15行、「三才を四として——、五龍を六として——」という表現は、何晏「景福殿賦」（『文選』卷十一）の、魏の明帝を称えた「方に三皇を四にして五帝を六にす、曾ち何ぞ周夏の言ふに足らん」を踏まえる。したがって「三才」は「三皇」を言い換えたものと考えられる。三皇は伝説上の上古の皇帝、伏羲、神農、女媧をいう（他の説もある）。「五龍」は『史記』三皇本紀に「五龍氏」と見えるが、五人の兄弟が龍に乗って昇り下りしたことしか記さない。しかし、菅原道真の348「九日宴に侍り、群臣寿を献ず」（『菅家文草』卷五）には、「祥光見んと欲す三象を聯ぬること

を、宝祚知るべし五龍に邁すすぎんことを」とある。「寿」を主題とする詩に持ち出されていることから、典拠は未詳であるが、五龍氏は長命を保った帝王とされていたと考えられる。天皇の秀れた様子、行動あるいは寿命は中国上古の帝王にも勝ると称える。「甘寝」は安眠、「璇璣」は天体を観測する機械が本義で、ここでは帝王が行う政治の意。「玉燭」は君王の徳を玉の光にたとえる。18行はそれを天下の人々が謳歌するという。

次に太皇太后と中宮である。「太皇太后」は正子内親王である。嵯峨天皇の皇女で、淳和天皇の皇后となり、斉衡元年（八五四）四月、太皇太后となる。「中宮」は皇太夫人をいう。藤原良房の娘、明子で、文徳天皇の後宮に入り、清和天皇を生む。天安二年（八五八）十一月、清和の即位に伴い、皇太夫人となる。「摩耶」は釈迦の母で、明子をなぞらえる。「累劫」はきわめて長い時間、「坤元」は大地。次いで「親王、諸王」と「相府、卿門（大臣、公卿）」

であるが、それぞれ「北辰に拱して」、「南岳に抛りて」に続く。前者は『論語』為政の「政を為すに徳を以てすれば、譬たとへば北辰其の所に居て、衆星の之れに共するが如し」による。「拱」は「共」に通じる。おじぎをする。藩

屏たる皇族の立場をいう。後者はやや手が込んでいる。漢の武帝は元封五年、南巡の途中、天柱山（安徽省）に登り祭祀を行い、この山を「南嶽」と呼んだ（『史記』卷十二、孝武本紀）。一方、『晋書』卷十一、天文志に、「天柱」という星があり、「人に在りては三公と曰ひ、天に在りては三台と曰ふ」とある。この二つを合わせると、「南岳」はすなわち「三公（大臣）」ということになる。

次に「百僚の臣」、「千城の宰」、百官と諸国の国守である。「比屋」は建ち並ぶ家、「闔門」は一家全部の意。これらの人々にも幸福が及ぶであろう。

26行、最後は仏語を用いて結ぶ。「十方」、「三界」、あらゆる所、すべての世界。「塵区」は迷いの世、「智岸」は悟りを得た世界。27行の表現は奈良朝写経として知られる天平十五年五月十一日経の光明皇后の願文の、同じく末尾の「並びに塵区を出で、俱に彼岸に登らん」にはなほだ近い。

貞観三年三月に行われた東大寺大仏開眼供養会で誦誦された「呪願文」（願文）を読んできた。それに基づくと、りあえずの要点は二つである。一つに、この文章は四六駢儷文によって書かれている。また、内容は、私見で六つに

分けたが、次のことが記述されている。

- 一、聖武天皇による盧舎那仏建立
- 二、文徳朝、斉衡二年の仏頭落下
- 三、文徳朝における修復
- 四、修復の完成
- 五、清和朝、貞観三年の開眼供養会
- 六、祈願

このうち、三、五、六に多くの筆が費されている。

これは本稿にとつては副次的なことであるが、文章表現の典拠、先例等に留意して読んだので、他の文献との関わりも見えてきた。そのうち、殊に興味を引かれるのは、今は『文苑英華』に収録されて残る、初唐の王勃作の碑文の表現が撰取されていることである。

この法会では「呪願」（呪願文）も捧げられている。これを読み解くことと、二首の願文の読解から導き出される問題点の考察は後稿で行う。

注

- (1) 後藤昭雄「呪願文考序説」(『平安朝漢詩文の文体と語彙』勉誠出版、二〇一七年)。

- (2) 後藤昭雄「平安朝の願文―中国の願文を視野に入れて」

(注1著)。

- (3) 寛弘六年(二〇〇九)二月に起こった一条天皇皇后彰子呪詛事件に際して行われた仁王会では願文と呪願文とが作られている。

- (4) 佐伯有清「再度の大仏開眼と真如親王」(『高丘親王入唐記』吉川弘文館、二〇〇二年)。仏頭の落下から修理完成に至る経緯についてもこの書に詳しい。

- (5) 注4著参照。

- (6) 『西京雜記』に、漢の高祖が秦の滅亡後、咸陽宮に入り、財宝の中から人の内臓も写し出す始皇帝の鏡を見出だしたという話が見えるが、この文脈にはふさわしくない。